

親子関係に影響する要因の検討～親子で大動脈炎症候群に罹患した一事例を通して～

東病棟7階 ○竹川さやか 村上恵美 村本悠里 苗代こずえ
浅井南乃 三本松恵 渡邊真紀

キーワード：大動脈炎症候群、親子関係

はじめに

原因不明の大動脈炎症候群（別名：高安病）に罹患した親子にそれぞれ関わる機会があった。この親子は互いの診断から5年の歳月を経ており、関わった時期には親子関係に特別問題があるように見えなかった。村田らは「家族の一員が病むことは、病者のみならず家族にもさまざまな影響を及ぼし、またこれが病者の心理に反映する。病者の苦痛・不安は健康障害や病状・治療処置の他に、発達や家族・社会に関わるものが少なくない。」¹⁾と述べている。当事例では家族内の一員でなく、親子で原因不明の同じ病気に罹患している。さらに、母の半年後に娘が発症していること、娘が19歳という青年期に発症したこと、病気自体が生命に危機を及ぼす合併症を招く可能性があり不安が大きいのと思われ、同じ病気に罹患したことは両者への影響がより大きく、非常に複雑な心理・関係を経て現在の良好な関係を築いたのではないかと考えた。同じ病気に罹患した親子を対象とした研究は、一方の対象から捉えたものはあるが、両者から分析したものはなかった。そこで今回、同じ病気に罹患したことが親子関係にどのように影響したのか、現在の親子関係を築くまでにどのような要因が影響したのかを明らかにしたいと考えた。

I. 研究目的

親子で大動脈炎症候群に罹患した一事例を通して、同じ病気に罹患したことが親子関係にどのように影響したのか、現在の親子関係を築くまでにどのような要因が影響したのかを明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究対象：東病棟7階に入院経験のある、同じ病気を持つ娘と母
2. 研究期間：平成16年7月～平成16年10月
3. 研究方法：質的研究
4. データ収集方法・分析方法：医療記録調査及び半構成的面接とした。医療経過記録より情報収集し、患者の状態把握を行った。研究者2名が対象を個別に半構成的面接を行った。診断を受けた時期から現在に至るまでの

親子関係について自由に話してもらうことを配慮した。面接は本人の了承の上、録音し逐語録を作成した。娘と母の両側面から、親子関係に影響したと思われる要因を抽出した。

5. 倫理的配慮：研究の主旨、及び参加の自由、秘密保持について研究承諾書の書面を用いて説明し同意を得た。なお、途中中止しても治療行為は変わらず、何ら不利益がないことを約束した。

6. 用語の定義：親子関係とは「生涯にわたって続く社会的・情緒的關係である」²⁾と定義されている。この研究では親子関係を、娘や母の思い・態度や行動・相手の反応といった相互作用とする。

III. 事例紹介

1. 娘：現在24歳。1999年8月（18歳）39度台の発熱・関節痛・眩暈等出現し近医よりK病院に紹介入院し、壊死性リンパ節炎と診断されステロイド内服開始となる。その後急性Tリンパ球性白血病と診断を受け、N病院に紹介され内服調整していたが、ステロイド減量と共に症状悪化認め、2000年3月（19歳）当院紹介入院となり大動脈炎症候群と診断される。病態は左内頸動脈・右腕骨動脈・鎖骨下動脈の狭窄を認めている。その後炎症反応が上昇し同年5月、2002年5月、2004年7月に入院している。

2. 母：現在49歳。1984年（29歳）誘因なく微熱・吐気・体重減少認めたが自然に軽快。その後定期検診でも異常は指摘されず、1998年（43歳）検診で血圧の左右差を指摘され、1999年1月（44歳）の入院で大動脈炎症候群と診断される。炎症所見はなく活動性は消失しており、右鎖骨下動脈の完全閉塞を指摘されたが、副側血行路にて栄養されておりバイパス術の適応でなく内服加療となっている。2003年7月（48歳）血管造影の為、入院しているが状態は不変であった。

3. 家族構成：父（会社員）、母（公務員）、娘（アルバイト）、弟（大学生）の四大家族。

4. 性格：娘は明るく、努力家で、負けず嫌い。母は明るく、楽道家。

IV. 結果

1. 母の発症時の親子関係：娘は「お母さんの病気ってあんまり把握していなかった。血管の病気っていうのは聞いてたけど、詳しくは知ろうとしていなかった」と話された。母は「詰まってしまったものは仕方がない。薬飲んで制御しとればいいんなら、これでいいや」と話された。

2. 娘の発症時の親子関係：娘は母に「移された」と感情をぶつけていた。母は「責められたときは自分のせいかなって自分のことを責めたりした。だから結構泣いたこともあった」と話された。しかし、お互い「関係は変わらなかった」と話された。

3. 現在の親子関係：娘は「何でも話せる友達のような関係で、母親の支えになっているのは自分だと思う」「病気になったけどこの家に生まれてきてよかった」と話された。母は「何でも話せる友達のような関係」「娘にとって私が支えになっている」と話された。病気に対して両者とも「病気と仲良く付き合っていかなん」と話された。特に娘には就職への不安、母には娘の将来に対する不安があった。

4. 現在の親子関係を築くまでに影響した要因

娘から抽出された要因は【成長発達】【同じ病気の強み】【母への強まる信頼感】【なんでも話せる関係】【病気の認識】【主治医との信頼関係】【彼氏の支え】の7つであった(表1)。母から抽出された要因は【娘への強まる愛情】【同じ病気の強み】【なんでも話せる関係】【病気の認識】【主治医との信頼関係】【自分の母の支え】の6つであった(表2)。

V. 考察

親子関係とそれに影響した要因について、独自の関連図を作成した(図1. 2. 3)。

母は発症時、公務員として仕事に就き、子育ても一段落し、精神的・社会的にも安定していた。さらに病気の活動期は過ぎ自覚症状がなく、診断の衝撃は少なく、受け入れていた。また、娘は母の病気に関心が低く、母の発症が親子関係に及ぼす影響は少なかったと思われた。この時期【なんでも話せる関係】がもともとあったが、母が娘を支える親子関係であった(図1)。

それに対し、娘は19歳で発症し、念願の栄養士の就職を目前にしていた。村田らによると「青年期から成人期は、人が自分の人生について重要な選択をし、それを具体的に実現させていく時期である。育った家族からの独立、新たな家族の生成と発達、仕事への関与、さらには両親との関係、友人や仲間、地域社会との関係など、その個人の価値によって方向づけられるライフスタイルの確立をしていく」³⁾と述べているように、娘にとって精神的・社会的な発達課題に重要な時期であった。また、

発熱・関節痛など炎症が激しく、身体的な問題も大きかった。娘は「病気なんだから親は子の面倒を見るのが当たり前」と話し、度々母に感情をぶつけていた。それに対し母は遺伝ではないと知りながらも、自責の念を持ち、思い悩んでいた。しかし、娘の発症前と、変わらない態度で接し続け、母の役割行動を遂行しており、精神的な葛藤があった。このことから、娘の発症は親子関係を大きく揺さぶる危機であったと思われた。

娘は発症時、自分の病気を中心に考えており、母が娘をより強く支える親子関係があったと思われる。その親子関係に影響した要因として、娘の【同じ病気の強み】【病気の認識】【彼氏の支え】や、母の【娘への強まる愛情】【同じ病気の強み】【病気の認識】【自分の母の支え】が挙げられた(図2)。

その後5年経過し、お互いに不安を抱えながらも病気を前向きに捉えており、お互いが精神的な支えとなっていた。娘には特に<親に迷惑・心配をかけたくない気持ち><親孝行したい気持ち><自立したい気持ち>といった著しい【成長発達】があった。母の支えになれるのは自分しかいないと感じ、母を支える娘の力が大きくなっており、母との距離がより縮まったと思われた。その親子関係に影響した要因として、娘の【同じ病気の強み】の増加、【母への強まる信頼感】【主治医との信頼関係】や、母の【主治医との信頼関係】が挙げられた(図3)。

今回研究するに当たり、同じ病気に罹患したことは、親子関係への影響がより大きく、非常に複雑な心理・関係を経ていると予測した。実際に親子関係への影響は大きかったが、親子ともに【同じ病気の強み】を感じていたことが分かった。娘は診断当初から<母親から知識を学ぶ>ことで強みにしていた。その後、病気の受容・成長発達とともに、<母の言葉の重み><共に病気に立ち向かう存在の心強さ>を感じており、同じ病気をより強みにしていた。母は自責の念を感じていたが<経験に基づいた説得力のある言葉・態度で娘を支える>ことや、<経験に基づく安心感>で娘に関われ、母親役割を遂行することができ、同じ病気を強みにしていた。

同じ病気に罹患したことで、母が娘を支える関係から、お互いを支える関係に変化しており、親子関係は成長・発達していると思われた。鈴木らは「健康問題と家族の関わりについては、家族は患者と共に悩み、患者と共に闘い、家族として成長・発達する存在である」⁴⁾と述べている。看護師は、家族が互いに相互作用し、成長・発達していく存在であることを念頭に置き、関わっていくことが重要であると思われた。

VI. まとめ

1. 同じ病気に罹患したことは親子にとって危機であったが、母が娘を支える関係から、お互いを支える関係に変化しており、親子関係は成長・発達していた。

2. 現在の親子関係を築くまでに影響した要因として、娘からは【成長発達】【同じ病気の強み】【母への強まる信頼感】【なんでも話せる関係】【病気の認識】【主治医との信頼関係】【彼氏の支え】の7つ、母からは【娘への強まる愛情】【同じ病気の強み】【なんでも話せる関係】【病気の認識】【主治医との信頼関係】【自分の母の支え】の6つが抽出された。

Ⅶ. 本研究の限界

発症から5年経過していること、性格・他の家族との関係等を含めた分析でないため、要因を全て分析したとは言い難い。今後は他側面から要因を明らかにする必要

がある。

引用文献

- 1) 村田恵子、他：看護の視点からみた現代社会における病者一家族の心理過程 臨床看護 21 (12) P1759 L13~16 1995
- 2) 小倉啓宏：看護学大辞典第4版 P218 L36~38 (株)メヂカルフレンド社 2000
- 3) 引用文献1) P1760 L23~28
- 4) 鈴木和子・渡辺裕子：事例に学ぶ家族看護学 P9 L3~4 廣川書店 1999

参考文献

- 1) 引用文献1)

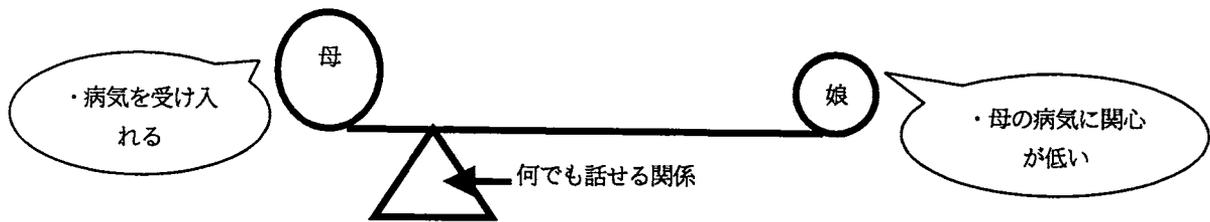


図1：母の発症時

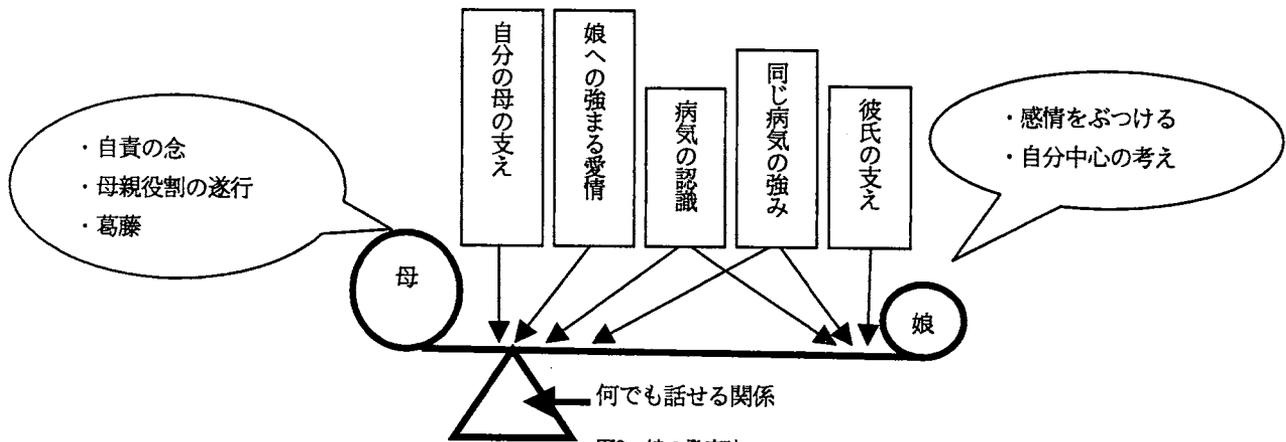


図2：娘の発症時

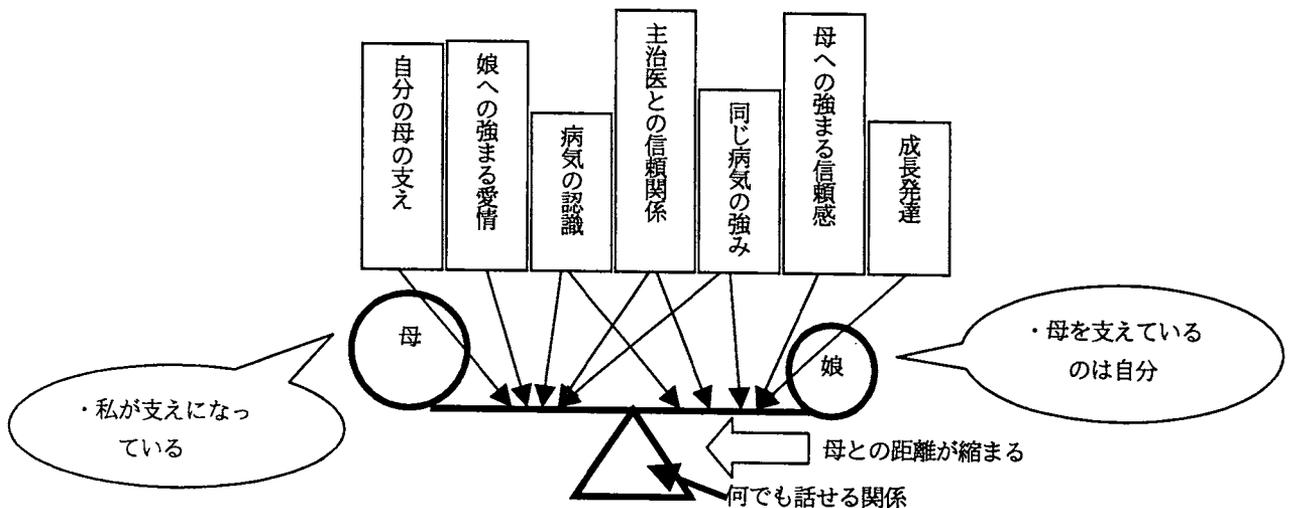


図3：現在

表1：娘から抽出された要因

要因	内容	娘の言葉
成長発達	親に迷惑・心配をかけたくない気持ち	・親に金銭的に甘えてた。自分でできるものならしなきゃいけない。意識の持ち方が変わってきた ・病院に入ってひどい目にあうって自分だけじゃなくて、やっぱり親にも迷惑がかかってくる ・薬増えたら自分もショックやけど、親がもっとショック受けるの分かるとるから、ちょっとしか増えないから大丈夫、大丈夫と言ってる
	親孝行したい気持ち	・(母が)入院してる間は家のことは任せとけ、なんも心配せんでいいからって思う
	自立したい気持ち	・親は頑張らなくてもいいって言うけど、自分の中で、病気も分かるけどバイトして稼ぎたい
同じ病気の強み	母から知識を学ぶ	・ネットで調べた文を読むと怖いことが一杯あって、母から聞くほうが軟らかく受け止められた
	母の言葉の重み	・(母の注意を聞かず、自分のやり方を通したことにより入院することになったことに対して) やっぱりお母さんの言う事は聞くようにせんなん。一人じゃ何もできない
	共に病気に立ち向かう存在の心強さ	・1人やったら負けそうになる時もあるけど、病気に立ち向かう人が、一緒にいると思ったら、頑張らんなんっていうのは実感する
母への強まる信頼感	・お母さんに(病気を)移されたってあたってたけど支えてくれてた ・親は子の面倒をみるのが当たり前やと思っていた ・(母の態度は)普段とあんまり変わらなかつた	
何でも話せる関係	・なんでも話せる友達みたいな感覚で逐一報告するくらい仲良い親子	
病気の認識	治る希望	・大動脈炎症候群は2、3年で治る病気と言われたから、白血病よりました
	遺伝ではない	・遺伝ではないって聞いたらそう受け止めるしかないなって思った
主治医との信頼関係	・Y先生とぶつかったのがあったから、何でも話せる関係になった ・お母さんも同じ病気でY先生に診てもらってるし、お母さんの告げ口をした。先生がもっと強く言わんから(お母さん)タバコ止めれんのか、もっと強く言っつて(Y先生に)言っつた	
彼氏の支え	・彼氏が支えてくれた	

表2：母から抽出された要因

要因	内容	母の言葉
娘への強まる愛情	発症後も変わらない態度	・わがままなことは言わせなかつた
	母親役割の遂行	・お母さんが大丈夫だから、あんたも大丈夫よって。薬で治るんやったらラッキーやって。一日も早く治しちゃおうって言っつた
同じ病気の強み	経験に基づく説得力のある言葉・態度で娘を支えているという実感	・自分が経験してきた検査だったら、お母さんやってるから大丈夫だよって言ってあげられる。自分の時は始めてやから不安やったけど、心配することはないよって言ってあげられる ・同じ病気でよかった。同じ病気で自分が今こうだから大丈夫だよって言ってあげられる
	経験に基づく安心感	・私がかこまで気付かずにやってきても大丈夫だったんだから、大丈夫だって逆に安心した ・自分が経験してるから、娘が検査受けることに対して安心感があった ・家に1人だけ初めてそうなった難病の子じゃないから、そういう面では安心して
何でも話せる関係	・何でも話せる関係は続いている	
病気の認識	治る希望	・私と違って、あの子はまだ詰まってるから完治するって言われてるから早く完治させようと思ってる
	遺伝ではない	・遺伝じゃないって知ってたし、娘にも言っつた。でも、採血してちゃんとした検査してくれて、遺伝じゃないってしっかり伝えてくれた。それまではけっこうきついもんがあったね。
主治医との信頼関係	・強い味方ってかんじ ・同じ先生だし、両方の病気の違いとかっていうのも聞きやすいし、よかったって思う。	
自分の母の支え	・あんまり人には相談しないけど、母親には娘からこんなこと言われたって言っつた	